アンドレ・モーロワ著「フランス敗れたり」ウェッジ 2005 年 5 月 27 日刊を読む（Ⅱ）

「英仏はなぜ戦争準備ができていなかったか」について

１．1935 年 12 月末のある日、私はレスリー卿老婦人の客間で、ウィンストン・チャーチル氏と午餐を共にしていた。チャーチル氏は、この名門の老婦人の甥に当たるのであるが、午餐の後で、私の腕をとって小さな部屋へ案内するのであった。
「モーロワ君、小説を書くのはやめ給え。伝記を書くのもいけないよ」

２．チャーチル氏が、いきなり無愛想な口調でこう言ったので、私は吃驚して、氏の顔をじっと見詰めた。
「小説もいけない。伝記もいけない。その代り、一日一篇評論を書くんだ」
とチャーチル氏は続ける。「その評論も、内容はただひとつだ。いいかね、フランスの空軍はかつては世界第１位であったが、今日では第４位か５位に転落している。ところが、ドイツの空軍はかつては微々として無きに等しかったのが、今日では世界第１位に迫ろうとしている。これだよ！君はフランスへ帰って、この事実を毎日書き立てるんだ。フランスが君の説に耳を傾けるようになれば、君は女の愛だの、男の野心だのを書くよりも遙かに偉大なる業績をのこすことになるんだ」

３．この提案に対して、遺憾ながら私は空軍の専門家では無いから、空軍を語る資格も無く、仮に私が空軍を語ったところで、誰も耳を傾けるはずは無いんだから、私は私なりに相変わらず小説を書き、伝記を著すべきだろう――と、答えたのである。

４．「君の考えは間違っている」。チャーチル氏の口調はいかにも皮肉ではあるが、発音が少し口籠もって不明瞭なので、それが却って一種の快い風格を感じさせるのである。
「君の考えは間違っている。現在、ドイツの空軍力に体現されている脅威というものは、これは確かにフランス国民の興味を呼ぶ題目だ。いいかね、君の祖国フランスは、ドイツ空軍のゆえに滅亡するかも知れないんだ。文化だの文学だのは、それは確かにいいものには相違ないが、しかし、モーロワ君、力を伴わない文化は、明日にでも死滅する文化となってしまうんだからね」

５．ウィンストン･チャーチル氏の忠告にも拘わらず、私は一度もそうした評論を書かなかった。今日、私はそのことを痛切に残念に思い、あの時の会話が、今も割り切れぬ後味の悪さとなって、深く私の印象に残っているのである。

［コメント］
2006 年 10 月 16 日のこの「書き抜き読書ノート」のコーナーでの紹介に引き続き、アンドレ・モーロワ著「フランスは敗れたり」の第 2 回目の紹介。フランスの隣国のナチス・ドイツの軍備増強と臨戦体制強化に備えられず、フランスへのナチス・ドイツの侵攻を許してしまったことについて、フランス人作家、評論家のアンドレ・モーロワの回想。第１回目の紹介とともに御一読を。

― 2015 年 10 月 19 日　林　明夫記―

アンドレ・モーロワ著「フランス敗れたり」ウェッジ 2005 年 5 月 27 日刊を読む

国を守るとは何かを考える―

独りになってから、私は長い間、今の会話を色々と考えてみた。やがて私は鉛筆をとり出して、手にしていた本 ―― それはバルザックの小説であったが ―― のカヴァーに次のように書いた。

救済策 ――

（1）強くなること

―― 国民は祖国の自由の為にはいつでも死ねるだけの心構えがなければ、やがてその自由を失うであろう。

（2）敏捷に行動すること

―― 間に合う様に作られたる一万の飛行機は、戦後の五万台に優る。

（3）世論を指導すること

―― 指導者は民に行くべき道を示すもので、民に従うものではない。

（4）国の統一を保つこと

―― 政治家というものは同じ船に乗り合わせた客である。船が難破すればすべては死ぬのだ。

（5）外国の政治の影響から世論を守ること

―― 思想の自由を擁護するのは正当である。
しかし、その思想を守る為に外国から金を貰うのは犯罪である。

（6）非合法暴力は直接的かつ厳重に処罰すべきである

―― 非合法暴力への煽動は犯罪である。

（7）祖国の統一を攪乱しようとする思想から青年を守ること

―― 祖国を守る為に努力しない国民は、自殺するに等しい。

（8）治めるものは高潔なる生活をすること

―― 不徳はいかなるものであれ、敵につけ入る足掛かりを与えるものである。

（9）汝の本来の思想と生活方法を熱情的に信ずること

―― 軍隊を、否、武器をすら作るものは信念である。自由は暴力よりも熱情的に奉仕する値打ちがある。

ここまで書いた時、アドリアンが血の流れる指を差出しながら走ってきた。
「僕、自分で切ったんだ」と、少年は言う。「モーロワさんは繃帯の捲き方を知ってる？」
私は最善をつくして繃帯を捲いてやった。　P.183 ～ 185

― 2006 年 10 月 16 日記 ―